

書評

柄澤昭秀 著

新 老人のぼけの臨床

鈴木 莊一（日本プライマリ・ケア学会副会長/鈴木内科医院）

柄澤先生との出会いは昭和55年に遡る。当時私達の地域医師会（大森）では、老人の精神保健衛生事業に先駆的に取り組んでいた。その助言者が柄澤先生であった。私達はすでに高齢化社会を予想して地域の包括的ケアを推進すべく自治体や市民代表としての民生委員を加えて、ぼけ老人の相談コーナーを医師会で開いていた。これは当時の日本医師会長であった武見太郎先生からも多大に評価されていた。その事業の専門的支援者が柄澤昭秀先生であった。その頃先生は「老人のぼけの臨床」をちょうど刊行されていた。

この柄澤先生が改版ではなく、痴呆について新しくその後の最新医学知見を加えて新著を書かれた。通読してみて何より読みやすい。そして介護保険における主治医意見書を書くのにきわめて参考になる。痴呆について今まで疎かったプライマリ・ケア医にとっても有用性が高い。これを読めば痴呆患者の初期でも判別できるノウハウが記されている。

まず先生は痴呆の概念を解説され、それから介護保険モデル事業で判明したように、かかりつけ医が痴呆は認められないと診断したのにもかかわらず訪問調査委員が患家を訪問してみると、家族から痴呆らしい患者の症状を伝えられることなどからして、痴呆の初期症状をいかに捉えるか、その困難性を指

摘され、かつ痴呆度選別の基準にも触れておられる。さらに純粋な意味での痴呆であるアルツハイマー型痴呆では特効薬がない以上、いかに上手に心理精神的に介護することが大事であるか、しかも痴呆患者の約75%が在宅で生活していることからして、在宅医療に関わるプライマリ・ケア（その言葉は直截的に記載されていないが）を担うかかりつけ医の役割の重要性を述べておられる。むろん痴呆患者の在宅ケアでは、介護者の肉体的・精神的疲労度が長期に蓄積され疲労困憊することから、施設ケアの意義も強調されている。そして痴呆患者のグループ・ホームについてもメモの1つとして取り上げておられる。

私はこの本の中で痴呆患者への先生の愛情のようなものを感じた。痴呆患者の人権にも触れておられるが、超高齢社会を迎えるわが国において、痴呆と老化は深く関係する（80歳代になると痴呆患者は急激に上昇する）。ホモ・サピエンスである人間の老化には多くの遺伝子の関係があるとしても、いずれは自分自身の問題でもある。本書はまことに時宜に合った出版であり、普く医師そして医療関係者にとって、医学的にも、かつ人間学の立場からも必読の書として皆様に是非ともお薦めしたい。

（A5 頁184 2,600円＋税 1999 医学書院刊）